

令和4年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について —更なる授業改善を目指して（第7報）—

崇城大学FD委員会 内田 浩二*¹、佐藤 和歌子*²、米村 弘明*³、大嶋 康裕*⁴ 編著
久次米 通孝*⁵、櫛山 興生*⁵、池辺 洋一郎*⁵、中牟田 侑昌*⁶、井野川 人姿*⁷
馬頭 亮太*⁸、大栗 誉敏*⁹、宝来 華代子*¹⁰

Lectures of the “Best Teaching Award” Winners 2022 —Idea for Improvement (7th Report)—

by

Written and Edited by Koji UCHIDA*¹, Wakako SATO*², Hiroaki YONEMURA*³
and Yasuhiro OHSHIMA*⁴

Faculty Development Committee, Sojo University

Michitaka KUJIME*⁵, Koki KUSHIYAMA*⁵, Youichirou IKEBE*⁵, Yuusuke NAKAMUTA*⁶,
Hitoshi INOKAWA*⁷, Ryota BATO*⁸, Takatoshi OOKURI*⁹
and Kayoko HORAI*¹⁰

要 旨

崇城大学では COVID19 感染拡大防止の観点から、令和2年度から遠隔授業が実施されてきた。この講義形態によって新たな教育手法や講義資料の活用方法が見出され、その教育効果が認められるまでに至った^{1), 2)}が、遠隔によるコミュニケーション不足や学力の低下（モチベーションの低下）も懸念された。一方では感染防止の方法が徐々に確立されたこともあり、令和4年度より対面講義がほぼ全講義で再開された。この年のベストティーチング賞（BTA: Best Teaching Award）は受講者数による3つの区分と SILC 教員の区分で選出され、8名の教員が表彰された。各受賞者には「学生にどう理解させるか」という教育姿勢が根底にあり、そこから生まれる各授業手法によって学生の能動的学修を促すことが学生のモチベーション維持・高揚に欠かせないことが示された。また、学生間の学力差を意識しつつ、学生の学修的容量を考慮した授業進行も重要であり、これら一つ一つの対応が教員の熱意として学生に伝わることも示唆された。

Key Words : FD 活動、授業評価、ベストティーチング賞、教育刷新 SEIP

*1 崇城大学工学部機械工学科准教授
*2 崇城大学芸術学部美術学科准教授
*3 崇城大学工学部ナノサイエンス学科教授
*4 崇城大学総合教育センター准教授
*5 崇城大学工学部宇宙航空システム工学科教授

*6 崇城大学工学部機械工学科助教
*7 崇城大学工学部ナノサイエンス学科准教授
*8 崇城大学芸術学部デザイン学科助教
*9 崇城大学薬学部薬学科教授
*10 崇城大学総合教育センターSILC 教授

表1 令和4年度BTA授業教員と授業に関する基本情報

表彰区分	教職員 (敬称略)	授業科目名	受講学生	履修者数 (人)	分野	必修/選択	授業形態	回答率 (%)	
受講者 20～29名	1年	久次米 通孝	航空法規I	(1操)	23	専門教育	必修	対面	100.00%
	2年	櫛山 興生	航空力学	(2操)	22	専門教育	選択	対面	100.00%
	3年～	池辺 洋一郎	航空機検査概説	(3操)	23	専門教育	選択	対面	100.00%
受講者 30～79名	1年	中牟田 侑昌	工業力学IB	(1機)	46	専門教育	必修	対面	89.13%
	2年	井野川 人姿	基礎無機化学	(2ナ)	45	専門教育	必修	対面	93.33%
	3年～	馬頭 亮太	インタラクシ ョン デザイン実習	(3デ)	33	専門教育	選択	ブレンド	84.85%
受講者80名以上	大栗 誉敏	薬学基礎生物学	(1薬)	140	専門教育	必修	対面	97.86%	
SILC教員	宝来 華代子	TOEIC演習	(2全学科)	40	基礎教育	選択	対面	85.00%	

表2 BTA受賞教員に対する学生アンケート結果

教職員	授業科目名	授業アンケートの質問項目											当該科目 平均値	当該科目 平均値/総科目 平均値
		第 5 項	第 6 項	第 7 項	第 8 項	第 9 項	第 10 項	第 11 項	第 12 項	第 13 項	第 14 項	第 15 項		
久次米 通孝	航空法規I	4.65	4.68	4.74	4.65	4.70	4.39	4.73	3.70	4.70	4.91	4.59	4.58	1.05
櫛山 興生	航空力学	4.82	4.86	4.82	4.86	4.86	4.82	4.91	4.82	4.86	4.91	4.86	4.86	1.12
池辺 洋一郎	航空機検査概説	4.78	4.83	4.87	4.78	4.74	4.61	4.87	4.83	4.83	4.78	4.78	4.79	1.10
中牟田 侑昌	工業力学IB	4.54	4.55	4.49	4.61	4.83	4.59	4.73	4.88	4.88	4.71	4.56	4.67	1.07
井野川 人姿	基礎無機化学	4.40	4.31	4.50	4.62	4.64	4.64	4.62	4.68	4.69	4.60	4.64	4.58	1.05
馬頭 亮太	インタラクシ ョン デザイン実習	4.71	4.61	4.67	4.68	4.82	4.54	4.75	4.82	4.79	4.79	4.64	4.71	1.08
大栗 誉敏	薬学基礎生物学	4.71	4.53	4.58	4.42	4.82	4.50	4.77	4.79	4.79	4.63	4.51	4.64	1.07
宝来 華代子	TOEIC演習	4.38	4.26	4.41	4.65	4.62	4.62	4.53	4.76	4.79	4.65	4.56	4.57	1.05
受賞者の各項目の平均		4.62	4.58	4.63	4.66	4.75	4.59	4.74	4.66	4.79	4.75	4.64	4.67	1.07

令和4年度の学生授業アンケートにおける質問項目の内容

【Ⅱ 授業内容について】

- (05) この授業内容の満足度はいかがですか。
 (06) この授業内容を理解できましたか。
 (07) この授業を受けてその内容について興味や関心が高まりましたか。

【Ⅲ 先生との対話について】

- (08) 先生の授業中や授業外で学生の質問や発言などを促しましたか。
 (09) 学生の質問や発言に対して先生の対応はどうでしたか。

【Ⅳ 先生の授業方法について】

- (10) シラバスの説明がありましたか。
 (11) 授業に使用した教材や宿題は授業内容を理解するのに役立ちましたか。
 (12) 先生の話し方は聞き取りやすかったですか。
 (13) 授業に対する先生の熱意や誠意を感じましたか。
 (14) 授業中の勉強する雰囲気は良かったですか。
 (15) 授業の進む速さと量はあなたにとって適切だったですか。

1. はじめに

平成19年4月における大学設置基準の改正³⁾により各大学にFD実施が義務化されたことを受け、本学ではFD委員会を設置して教育の質改善に努めている。その一環として、毎年選出するベストティーチング賞（BTA: Best Teaching Award）受賞者の講義を公開する活動を進めている。これは受賞者の質の高い講義を他の教員が参観することで、各教員に“気付き”を与え、自らの講義内容の改善へと繋げて頂くことを目的としている。今回、令和4年度に実施された「授業に関する学生アンケート」で高い評価を受けた教員8名が、8つの講義に対してBTAを受賞した。このBTA受賞教員と授業科目に関する基本情報を表1に示す。

授業評価の一つである「学生アンケート」は平成13年度から実施されている。当初は学生の視点から授業内容を客観的に評価する内容が盛り込まれ、その結果が各教員にフィードバックされた。この「授業に関する学生アンケート」の実施形態は平成30年度から大幅に変更された⁴⁾。学生はまずポートフォリオにて学習到達度レポートを記載し、講義を受けた前後で学生自身の成長を振り返ることが課せられるようになった。その学習到達度レポートに紐づいて学生アンケートが行われている。つまり、学生による講義の客観的評価（感情的な批判を含む）のみではなく、講義における自分自身の間接的評価と講義内容を照らし合わせて講義全体を評価することになり、より信憑性のある（学生の本音が現れる）解答が得られる実施形態になった。

2. 「授業アンケート」について

令和4年度8名の受賞者に対する学生アンケート結果を表2に示す。アンケートの質問事項は、以下のように大別される。

- I. 学生自体の授業への取り組み
- II. 授業内容
- III. 教員との対話

IV. 授業方法

これらの質問項目のうち、BTA受賞を決定する際に用いられるのは、II～IVの第5項目～15項目の計11個である。この質問項目の詳細は表2の脚注に示してある。

崇城大学では令和2年度から3年度において、COVID-19感染防止対策の観点から対面授業（実習・実験系科目のみ）、遠隔授業および対面と遠隔を組み合わせた授業など多彩な講義形態が取り入れられた。これを受けて対面授業と遠隔授業のどちらの満足度も調査できるよう、下記の項目がアンケートに盛り込まれている。

V. 対面授業について

VI. 遠隔授業について

令和4年度、本学では講義全体を対面講義に戻すことが大学事務局より示された。しかし、一部の講義では遠隔授業も継続されたため、アンケート内容についても変更なく継続された。

以上の質問事項に対し、学生は3もしくは5段階の数値で回答する。表2は各BTA受賞者に対する各質問事項で得られた回答（数値）の平均値を示したものである。表2の右から2列目は第5項目から15項目までの平均値（当該科目平均値）を示している。また、表2の一番右の列にBTA受賞者の平均値と全教員のそれ（総科目平均値）との比を取った値を示した。

3. 各BTA受賞教員の授業への取り組みについて

令和4年度BTA受賞教員8名がどのように授業を構築したのか明らかにするために、各受賞教員に以下の項目について記述頂いた。

【記載項目】

1. 授業の概要
2. 授業で気をつけていること・工夫したこと
 - 例えば、次の1)～3)の取り組みや、その他の内容について述べている。
 - 1) 学生の興味・関心を高めるための取り組み
 - 2) 学生の理解度を高めるための取り組み
 - 3) 学生の質問や発言を促すための取り組み
 - 4) 1)～3)以外の独自の取り組み
3. 授業改善に向けた提言

表彰区分（履修者数、履修学年）に沿ってその取り組みについて順に紹介する。後述する結果（表3）にはポイントをまとめたものを記載した。

担当教員 久次米 通孝

科目名 航空法規Ⅰ

1. 授業の概要

2年生から開始される操縦訓練の際に必要なルールや遵守すべき法規について学習する。今後受験する、自家用操縦士、事業用操縦士技能証明に係る学科試験や、実地試験の際に行われる口述試験に合格するレベルを目指すとともに、実際の飛行訓練で活用できる知識の習得を行う。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

- 1) 学生の興味・関心を高めるための取り組み
 - ・授業の冒頭では、航空法には直接関係はないものの、空港キャンパスでの出来事などのトピックスを紹介し、操縦訓練に対するモチベーションの維持高揚に努めている。
 - ・航空法の背景を知り、理解をより深めるために、最初の授業では、航空の歴史を振り返り、世界の歴史のなかで航空がどのように発展してきたのか、そして現在の航空法の枠組みがどのように構築されてきたのかの講義を行っている。
 - ・航空会社勤務時等に実際に経験した具体的な事例を交えて講義を行っている。
- 2) 学生の理解度を高めるための取り組み
 - ・専門用語が出てくるが、出来るだけ平易な言葉に言い直し、また自動車など他の例を引き合いに出して、イメージが出来るよう講義を進めた。
- 3) 学生の質問や発言を促すための取り組み
 - ・質問を投げかけ、学生の理解度を見ながら講義を進める。対象が1年生なので、空を全く飛んだことも無く、飛行機が飛ぶ仕組みにつ

いても理解していないことから、方向違いの理解をしている学生がいないか確認して授業を進めている。

- ・法律の条文によっては読み上げさせ、その意味するところを説明させている。

4) 独自の取り組み

- ・航空法に定められている規定やルールがどのような場面で適用となるか、イメージを持たせるために、自分が訓練飛行を実施する場合を想定し、出発から到着までの各段階で遵守しなければいけない航空法の規定やルールを纏め、レポートとして提出させている。その際に一人では、気付きやイメージの膨らみに限界があるので、数名のグループに分け、議論しながらレポートを纏めるように指導している。
- ・航空法の条文の中には難解な文章で表現されているものがあるため、読んだだけでは頭に入らな入らない場合がある。そのような場合は、図に落とし込んでレポートとして提出するように求めている。その際も、数名のグループで議論しながらレポートを纏めるように指導している。
- ・操縦にあたっては多岐にわたる知識が必要となるが、一人での学習では限界もあることから、グループでそれぞれの持つ知識を出し合い、全体の知識レベルを上げるように指導している。

3. 授業改善に向けた提言

航空法の授業には航空専門用語などが出てきて、その解説・説明が必要となるが、それ以前に一般的な言葉・用語の持つ意味の正確な理解に乏しい学生が存在する。例えば、ある航空保安施設の説明を行わせると「…で、これは一種の2次レーダー方式を使用している。」との回答が出てくる。言葉で説明させると表面的には正解となるが、「2次レーダー方式」とは何かには答えられない。つまり、その施設の仕組みが分かっているのに、言葉の上では説明が出来るというようなこととなっている。

もっと一般的な言葉である「矩形」という言

業も、意味が「長方形」だとわかっていない学生が少なからず存在し、そのため矩形部分が何を指すのか正確に理解出来ていないケースがある。

法律の文章は長文でしかも括弧書きの補足文章もあることから、それを頭から読んで一度で理解するのは至難の業である。学生にはまず主語と述語を見つけ出し、そこから法律を説き起こしていく読み方を勧めているが、このようなことは既に高校までの国語の時間に学習しているはずである。

航空法の中には、期限、期間、距離など決められた値の数字を覚えなければいけない場合があるが、試験対策で丸暗記したものは時間がたつと忘れるものである。数字には、その数字に決まった根拠があるので、それを理解して覚えるように指導している。

学生は、教える側が思っている程、正しく物事の理解が出来ている訳ではない。もう一步掘り下げた、基本的な説明や確認が必要と感じている。

担当教員 櫛山 興生

科目名 航空力学

1. 授業の概要

力学に関する授業は、1年次の専門教育課程においても色々な形で取り上げられている。本科目は、2年生後期から実際に飛行機に乗り込んで操縦訓練を行うにあたり、教室で学んだ知識と実際の操縦訓練を結びつける役割を目指した授業内容としている。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

概要でも述べた通り、航空機の力学については1年次から学習しているはずだが、学生の知識レベルはさまざまである。また、高校時代の得意分野（理系科目もしくは文系科目）によっても大きな差がある。操縦訓練を行うにあたり、航空力学の分野でも規程といった書物は非常に重要であり、国家試験の口述試験でもその内容が問われることから、授業ではまず言葉の説明

から入り、まずは学生のバックグラウンドの違いによるレベルの差を埋めることを心掛けていく。

私自身、社会人になった最初の頃、航空力学を勉強する機会があった。「当時自分が分からなかった、あるいは理解に苦しんだ部分は今の学生も苦勞するのでは？」と考え、航空力学に限らず自分の担当科目では経験談も交えた授業を意識している。

また、航空操縦学専攻の学生とは言え、2年生前期までは実際の飛行機に触れる機会が少ないため、空港や訓練中のトピックスを織り交ぜることにより、彼らのモチベーションアップにも繋がると感じる。

プロのパイロットを目指す以上、学生には使える知識を身につけて欲しいと思っているが、残念ながらテストでいい点数を取るための勉強をしている学生が多いと感じる。そのため、期末テストでは記述式や計算式を用いた問題を多くし、応用力の向上を目指している。

3. 授業改善に向けた提言

ひと口に「航空力学」と言っても、基礎は同じであれ小型機（例えば、崇城大学で訓練に使用しているセスナ機）と大型機（エアラインの旅客機）では大きく異なる。学生は、崇城大学でエアラインに就職するために必要なライセンス取得に励むが、そこはゴールではなく通過点に過ぎない。エアラインに就職し機長を目指すためにも、在学中から大型機の運航を理解しておくことは非常に重要である。そこで、令和5年度からエアラインで長年機長を務めた先生に大型機特有の力学についても講義をして頂くこととした。これからも、使える知識の習得のため工夫していきたいと思っている。

担当教員 池辺 洋一郎

科目名 航空機検査概説

1. 授業の概要

本講義は航空操縦学専攻3年生の後期授業である。「航空安全」に関する授業で航空事故や

インシデント等について、「概要」「原因分析」「再発防止策」「改善策」等を紹介している。取り上げる航空事故やインシデントについては小職が前職で体験した事例や崇城大学で実際に発生した事例を主に紹介している。使用する資料は事故調査報告書や新聞記事等を引用している。新聞記事を引用することによって社会の厳しい意見や反響を紹介している。

学生にはこうした事故インシデントが発生する状況に、学生自身が陥りそうになった場合や陥ってしまった場合に、どのように対処すべきであったか、また陥らないようにするにはどうすべきであったか等をいくつかのグループに分かれ討議してもらい、グループの代表者に討議内容を発表してもらっている。

事故インシデントの多くがヒューマンエラーによるものである。事例の一つとしてパイロットは航空管制官の指示によって飛行するが、管制官も人であり「うっかりミス」、「言い間違い」がある。グループ討議では「少しでも違和感や不明瞭な点があればコンファームして管制官の意図を確実に把握する」、「思い込みをせず、疑問を抱いたら迷わず確認する」、「ミスの要因を把握しておけば警戒して可能性を減らすことが可能」、「人間は期待している答えを勝手に解釈して受け入れてしまう」といった学生からの提言があり、エアラインパイロットになった際に実践できることを期待したい。

多くのお客様の生命を預かる航空輸送において航空事故やインシデントが社会に与える影響やインパクトは極めて大きく、安全運航がいかに重要であるかを学生と共有できるように努めている。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

事故インシデントの発生の要因の一つとして法令や規定の違反がある。法令順守や規定順守は当然といえば当然のことであるが、なぜ当然のことができないのか。

最近でも、事故に至らないもののパイロットによる様々な不祥事が発生している。①パイロットの飲酒問題、②業務に関する SNS での不適切な投稿、③社有品や貸与品のインター

ネットでの販売、④保安情報の漏洩等、様々な不祥事が世間を賑わしており、企業のブランドイメージを棄損し信頼の失墜となっている。「だまっていればわからない」、「皆がやっているから」というのではなく、「社会の常識」という目から日々の行動について見直してみることの大切さを説明している。

学生には一人前のエアラインパイロットになるということは一人前の社会人として適正に行動できることであり、企業が求める「社会的責任」「法令順守」「コンプライアンス順守」といったことについて、前職の経験を踏まえて学生の腑に落ちるよう説明している。

法令違反を犯した企業はそのことにより社会的信用を失い、経営危機や倒産し社員は職を失うといった事例も数多くある。企業が求める法令順守やコンプライアンス順守は、学生時代とは大きく異なるものであり、最近では企業が取り組むべき経営課題の一つになっている。エアラインへの就活が始まるなかで、「エアラインが求める人材」の一つにこうした「コンプライアンスの順守＝誠実さ」を企業が重視していることを理解してもらいたい。

3. 授業改善に向けた提言

- 1) 一方的に説明するのではなく、毎回の授業の中で学生への質問を用意し「このことについて貴方はどう思いますか?」「このケースでは貴方はどうしますか?」といった問いかけを実施し学生の参加を促す。
- 2) 授業の後半にいくつかのグループ分けテーマを設けグループ討議をしてグループの結論を発表してもらおう。就活時の面接等で簡潔明瞭に自分の考えを話すことができることを目的とした訓練の一環でもある。

担当教員 中牟田 侑昌

科目名 工業力学 I B

1. 授業の概要

機械工学の基礎学問である材料力学、熱力学、

流体力学、機械力学は四力学と呼ばれ、それらの科目は物理学を基本としている。「工業力学Ⅰ」と「工業力学Ⅱ」は、物理学と四力学の架け橋となる科目であり、学生達が修学していく上で必要不可欠となる基礎知識を身に付けるために設けられている。工業力学Ⅰでは、力、モーメント、力のつり合い、静止した機械や構造物に働く力と力の効果（反力や内力）などについて講義しており、講義と補習、学科SALCを組み合わせて実施している。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

1) 学生の興味・関心を高めるための取り組み

本講義がいかに今後につながる重要な科目であるかを学生達に伝え続けている。学生達の大半が1年生であり、内容の修得だけでなく、意義を伝えることで早い段階から修学に対する意識付けをすることが重要と考えている。また、内容が基礎的で身の回りにある物理現象と結び付け辛い場合、写真や動画などを使用し、日常生活のどのような場面で知識が生かされているかをイメージさせてから説明を行っている。

2) 学生の理解度を高めるための取り組み

講義においては、板書とPowerPoint資料を用いて説明を行っている。これは双方に利点があるからであり、板書は書き写すことでより記憶に残りやすく、学生自らが見やすいと考えるノートを作成していくことでレポート作成能力向上や復習に繋げることができる。一方、PowerPoint資料は動画などの使用が可能であり、紙媒体で配布することができる。このため、板書では講義の中核となる文言や式の導出過程を説明し、PowerPoint資料では物理現象との結び付けや例題、解答例の説明を行っており、情報量に注意しながら説明に多くの時間を取り、補足として遠隔講義資料も活用している。また、講義の次時限に補習の時間を設定している。講義内容に沿った補習課題を配布し、板書やノート、講義用資料を用いて時間内に解答してもらう。この際、途中から教員や学生間での質疑応答を可能としているが、考えさせることが重要であるため、ヒントのみを与えるようにしてい

る。そして、解答後に回収し、採点やヒント記載後に返却することで学生達にフィードバックしている。補習課題の点数が芳しくない者は学科SALCへの参加を義務付けており、再度補習課題を解くことで理解度の向上を図っている。

3) 学生の質問や発言を促すための取り組み

教員と学生間での適度な距離感が重要と考えており、教員自身について知ってもらいつつ、学生について知る時間を設けている。講義とあまり関係のない雑談も多く行っており、抹茶でオススメの御店や好きな漫画について話しつつ、その日の講義内容に対する質問を受け付けている。このため、講義の時間配分については注意しており、板書は講義開始前にほぼ完成している。そして、上述の返却する補習課題には「遠慮なく質問して欲しい！」など、学生が質問しやすいようにコメントを記載している。

3. 授業改善に向けた提言

提言を行うにはまだ研鑽を積む必要があると考えている。しかしながら、あえて述べさせて頂けるならば教員と学生間における相互理解を深めることは重要と考える。学生目線で考える講義構築や理解度の把握、質問し易い環境構築などには必要ではないだろうか。そして、本講義においては、多くの学生が計算能力向上のために努力できているが、その計算と身の回りにある物理現象との結び付けができない者も多数存在する。誤概念や子供の科学と言われるものであるが、改善のために関連科目との情報共有を行っていきたいと考えており、科目によっては科目間の連携強化も重要であると考えている。

担当教員 井野川 人姿

科目名 基礎無機化学

1. 授業の概要

無機物質の構造や性質、反応性等について基礎や原理から学ぶための講義で、ナノサイエンス学科では2年生前期の必修科目として設定されている。専門科目の土台となる基礎科目であ

るため、基礎をインプットすることが主目的の講義である。本講義では、溶液の化学（主に酸塩基）、電気化学（酸化還元、電池等）、錯体化学に焦点を当てている。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

1) 学生の興味・関心を高めるための取り組み

抽象的な内容を分かり易く伝えるため、具体的な数値や例え話を多用した。学生が興味・関心を高められない原因の一つに「話を聞いても分からない」というのが挙げられる。教員が発した情報と学生が受け取った（理解した）情報の差が大きい場合に、学生は意欲や興味を失う。特に、概念的なものや数式を扱う場合に、その意味（本質）を捉えられるように気を付けた。また、最新の研究事例を交えて研究との関連性を説明することで興味を引き出す様に工夫した。

2) 学生の理解度を高めるための取り組み

理解度を高めるため、聞く時間と書く時間をきちんと分けた。毎回、講義スライドの一部を空欄にした印刷物を配布し、説明を聞いてもらった後に学生自身が書き込む時間を設けている。学生が書き終わってから次のスライドに進む形式にしている。また、各単元の後に実施する小テストを通じて、学生が理解度を確認し、誤答した部分を修正することで学習効果を高めている（直しの提出で修正点を与える）。

3) 学生の質問や発言を促すための取り組み

講義中に匿名で答えられるクイズやアンケート（Forms）を実施し、その結果をその場で公開することで、正答率や自分と同じ考え方の人がどの程度いるかをシェアできるようにした。これにより「授業に参加している」という意識を学生に持たせることができ、臨場感がでて、積極性が高まったように思われる。

4) 独自の取り組み

教室にて対面で実施した講義であるが、実際には Teams による同時配信と録画のオンデマンド配信を併用するハイフレックス形式を採用した。体調不良や諸事情で出席できない学生へ

の配慮であったが、講義の録画は、復習用教材としても活用され、理解度向上に役立った。

3. 授業改善に向けた提言

アウトプットを通じて知識や考え方が定着することを重視し、学生の能動的な学習姿勢を養うことが大切であると考えている。QR コードを読み込ませるだけで、学生達を観客席から舞台に連れ出すことができる。その舞台は、考えをアウトプットし、その結果を皆でシェアできる場であり、そこでの学びはより能動的になるはずである。Forms の他にも、LiveQ や Slido など、自由に質問やコメントを入力し、リアルタイムでそれをシェアできるツールがあるので、学生の参加意欲と能動的な学びをさらに促進する取り組みを検討している。

担当教員 馬頭 亮太

科目名 インタラクシオンデザイン実習

1. 授業の概要

インタラクシオンデザインは主にユーザー体験を伴う製品やサービスにおいて、デバイス端末やソフトウェア・アプリケーションと人間との接点を担うデザイン領域である。暮らしや社会の DX 化が目まぐるしく進む昨今、人と機械の円滑なコミュニケーションを常に検証・改善することを目的とするインタラクシオンデザインの重要性が高まっている。

本授業ではインタラクシオンデザインを考えるうえで重要になる UI（User interface）と UX（User experience）の両視点を深く理解することを目標に、下記の流れで授業を構成している。

1) ユーザー観察と特性の理解

製品やサービスと人間との接点におけるユーザー側の視点や、身体・心理状況を具に観察する。具体的には、投影した1枚の写真からどんな情報が読み取れるかをディスカッションし、得られた情報の階層を分類し派生させる机上トレーニングを反復して行う。

2) UX 向上につながる“小さな不満”への気づ

き

ユーザーがストレスを感じない操作感や動線設計においては、UI上の「小さな不満要素」を何らか好転させる工夫が求められる。身の回りのUIを実例に挙げ、どんな要素がユーザーの不満になりうるかを推察し、少人数のグループワークを通して多視点からの気づきを共有する。

3) UIデザインと改善提案

実在するウェブサイトやサービスを取り上げ、どのように改善すればUXが向上するかを検討・デザインし、プレゼンテーション形式で発表する。発表に対しては更なる改善のためのフィードバックを個別に行い、UI・UXに関する思考プロセスにおいてデザイナーが持つべき視点の習得と発案力を高めている。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

自身の経験や発想に偏り、安易に美的感覚だけが先行するUI・UXをデザインすることは、ユーザー体験を軽視したものになりがちである。本講義においては、個々の技能や表現力よりも、課題の背景にある前提の観察と自身の身体的もしくは心理的センサー（人間としての感覚）の感度を高めることを重視するため、ディスカッションやプレゼンテーションにおいては小さな個々の気づきを共有できるようにワークシートを併用している。また、1-3)で行う改善提案においては、複数の課題を設定し学生が最も取り組みたいテーマを選択制にすることで、能動的な取り組みにつながるように工夫した。

3. 授業改善に向けた提言

インタラクションデザインの領域は、常に情報技術の進化とともにある。本来、システム上に構築や展開を図る場面では、フロントエンド／バックエンドの開発エンジニアとUI・UXを担うデザイナーの綿密な連携が必要不可欠である。本講義においても同様に、例えば学科を超えたカリキュラム連携（情報学科など）ができれば、双方の学生にとってより魅力的な実習につながるのではないかと考えている。

担当教員 大栗 誉敏

科目名 薬学基礎生物学

1. 授業の概要

本学科の人材育成の目標の一つは、医療分野で活躍できる薬剤師である。高度な知識を身につけた薬剤師を目指す学生には、生命活動の理解の基礎となる本科目は必要不可欠である。生物学は、薬学を学ぶうえで重要な基礎学問である。この講義では、特に高校で生物を学んでいない学生に向け高校レベルの生物学を分かりやすく解説している。また高校で生物を学んできた学生は復習としてしっかり理解し直し、さらなる発展的内容へ進むためにつなげていく。また、講義を通して様々な医薬分野における課題に対応できる基礎能力と現象を定性的に捉えられる汎用的解析能力を養う。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

専門用語をなるべく使わず、分かりやすい言葉での講義を心がけた。また細胞内での分子の動きなどイメージすることが難しいものは、動画を用いて解説し、全てイメージして覚えていくことを伝えた。生物学は覚えることが多いが、細かい部分は省いて大まかな流れやその意義を理解させることを重視した。また事前に質問を受け付け、講義の途中でその質問に回答する「質問コーナー」を設け、集中力が切れないように工夫した。質問に関しても、人の体に関することや生活していく上でのことなど疑問に持ったことを幅広く受け、生物へ興味を持ってもらうことを狙った。学習に関して、毎回復習する習慣がつくように、講義の始めに前回講義の内容の確認テストを行った。理解力と文章力が向上するように、「○○について説明せよ」という文章形式を出題した。

3. 授業改善に向けた提言

教員側は専門性の高い知識を元に講義をするわけであり、教員側からすれば簡単と思う講義内容でも、学生にとっては難しいと感じることが多い。「何でこんなのが分からないのか」と思うのではなく「どうすれば（学生が）理

解できるのか」と考えるように心がけている。その為には、これ以上掘り下げて教えても無駄だと決めつけず、切り口を変えながら試行錯誤する必要がある。また教える量も重要で、1回の講義の情報量が多すぎると学生はついていけなくなる。教員は「覚えるべき事が沢山あるので、講義の情報量が多くなるのは仕方がない」という考えになりがちだが、学生は情報量の多さから要点が掴めず、理解せずに暗記していくようになってしまう。それよりも内容を絞って深く理解させていく方が、学力の向上につながると思われる。1回の講義でスライドや講義プリントが非常に多い状況は、学生のキャパを超える可能性があるため、それらの量は気を付けたいところである。もし、教えきれない項目がある場合は、教員間で情報を共有し、他の科目でフォローすれば解決できると考えられる。

担当教員 宝来華代子

科目名 TOEIC 演習

1. 授業の概要

この科目は TOEIC のリーディングセクションの学習対策を進めながら、基礎英文法理解と日常英会話やビジネスで活用される英単語の習得と長文読解力の向上を目指した。

2. 授業で気をつけていること・工夫したこと

1) 学生の興味・関心を高めるための取り組み

学生がクラスに参加しやすい、心理的に安心安全な学習環境の提供を目指し、学生同士の友好関係の構築が出来る対話の機会を取り入れた。また学生の主体性や自律性を育成するために、個々の取り組みを評価し、他者と比較ではなく自分自身の成長過程に着目するよう授業で話し、個別のフィードバックを行った。

2) 学生の理解度を高めるための取り組み

学生の TOEIC レベルには幅があった（200点台～700点台）ため、授業中の学習課題（練習問題）は、時間や問題量などを学生自身が選択できるようにした。例えば、問題を解く前に

復習する学生や、問題数や解答速度に重点を置く学生、問題数を減らして復習時間を確保する学生など、自分に合った学習方法や学習ペースを採用できるようにして、自分の理解度を意識し進むようにした。また、毎週の単語テストは、再チャレンジ制度を導入し、学生は必要なら再受験でき、平均点で評価した。復習や欠席者の学習用に授業の解説動画は Teams で配信した。

3) 学生の質問や発言を促すための取り組み

人前で質問が難しいと思う学生も多い為、練習問題の時間を活用して個別に質問がないか尋ねた。その際、良い質問は全体で共有し、解説した。また、授業後にポートフォリオ提出を義務づけ、不明点や質問があれば記入してもらった。

4) 独自の取り組み

月1回程度の席替えを行い、他の学科や学年の学生と交流する機会を増やした。学生は名札（三角柱）に自己紹介（学科、趣味、出身地、好きな〇〇等）を書いてもらい、授業開始直後のチャットタイム（5分間強）では、名札を見せながら自己紹介をし、2-3人でお題について話し合うことで、クラス内のコミュニケーションを促進した。

3. 授業改善に向けた提言

学習者が学びのオーナーシップと責任を持つことは、学修の成功や自律の育成にとって重要である。教員は「教える」という自己の視点からのみではなく、学生視点の「学ぶ」を意識し、多面的な思考と柔軟な教授へのアプローチが大切だと考える。学生の個性を尊重し、教室環境で学習の責任を可能な限り学生に委ねることは大切で、教員は学習環境のマネジメント責任者として、学生と協働して授業を構築するべきであろう。教員は、必要に応じた足場架けや学生の学びへの自覚喚起や主体的参加を促す環境整備の役割を果たすべきであろう。最後に、私自身が毎回の授業を楽しんでいたことが、学生から高い評価の要因であることを加え、学生へ深く感謝したいと思う。

4. 結果

各受賞者の各授業に関する報告から、

- 1) 授業で気をつけていること・工夫していること
- 2) 授業改善にむけた提言

の2つに着目してまとめたものを表3に示す。

気をつけていること・工夫していることについて大きくまとめると、

・授業の内容の工夫

・授業の方法の工夫

・学生間および教員との関係の工夫

が挙げられる。授業内容の工夫について多く見られるのは、如何に専門用語をかみ砕いて学生に伝えるかという点である。確かに専門用語で躓いた学生は、講義内容が興味深いものであってもそれに気づくことができない。学生間の学力差を意識しつつ、学生の“容量”を考慮した情報量を見極める細やかな配慮が共通点として挙げられる。

表3 BTA 受賞者が授業で気をつけていることや工夫および授業改善の抜粋

教職員	授業科目名	気をつけていることや工夫	授業改善の提言
久次米 通孝	航空法規Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・航空の歴史や自らの経験談を交え、学生のモチベーションの維持高揚に努めた。 ・平易な言葉で説明し、専門用語をイメージしやすいように工夫した。 ・質問を投げかけ、学生の理解度を見ながら講義を進めた。 ・数名のグループで議論しながらレポートを纏めるように指導した。 	一般的な言葉・用語の持つ意味の正確な理解に乏しい学生が存在し、教える側が思っている程、正しく物事の理解が出来ている訳ではない。もう一步掘り下げた、基本的な説明や確認が必要である。
楡山 興生	航空力学	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の知識レベルはさまざまであり、学生のレベルの差を埋めることを心掛けた。 ・経験談も交えた授業を意識した。 ・テストのための勉強ではなく、応力の向上を目指して指導した。 	ライセンス取得がゴールではなく、使える知識の習得に向けて工夫していくことが重要である。
池辺 洋一郎	航空機検査概説	<ul style="list-style-type: none"> ・「社会の常識」の観点から日々の行動を見直すことの大切さを説明した。 ・前職の経験を踏まえ、学生の腑に落ちるよう説明した。 	一方的に説明するのではなく、毎回の授業の中で学生への質問を用意し、問いかけを実施することで学生の参加を促す。グループ討議は面接等で簡潔明瞭に自分の考えを話す訓練となる。
中牟田 侑昌	工業力学ⅠB	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の修得だけでなく、意義を伝えることで早い段階から修学に対する意識付けを心掛けた。 ・課題は考えさせることを重視し、ヒントのみを与えた。 ・学科SALCと連携し、理解度の向上を図った。 ・教員と学生間の距離感が重要であり、雑談できる時間を設けた。 	教員と学生間における相互理解を深めることが重要である。学生目線で考える講義構築や理解度の把握、質問し易い環境構築のためにも科目間の連携強化も重要であると考える。
井野川 人姿	基礎無機化学	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な内容を分かり易く伝えるため、具体的な数値や例え話を多用した。 ・聞く時間と書く時間を分けた。 ・クイズやアンケートを実施し、“授業に参加している”意識を学生に持たせた。 ・講義の録画等を復習用教材として活用した。 	学生の能動的な学習姿勢を養うことが大切である。LiveQやSlidoなどのツールを活用し、学生の参加意欲と能動的な学びをさらに促進する取り組みを検討する必要がある。
馬頭 亮太	インタラクションデザイン実習	<ul style="list-style-type: none"> ・討論や発表においては気づきを共有できるようにワークシートを併用した。 ・テーマを選択制にすることで、能動的な取り組みにつながるように工夫した。 	学科を超えたカリキュラム連携（情報学科など）ができれば、双方の学生にとってより魅力的な実習につながるものと考えられる。
大栗 誉敏	薬学基礎生物学	<ul style="list-style-type: none"> ・専門用語をなるべく使わず、分かりやすい言葉での講義を心がけた。 ・事前に質問を受け付け、講義に回答する「質問コーナー」を設けた。 ・理解力と文章力が向上するように、説明を求める文章形式を出題した。 	「何でこんなの分からないのか」と思うのではなく「どうすれば理解できるのか」と考えることが重要であり、教えても無駄だと決めつけず、切り口を変えながら試行錯誤する必要がある。
宝来 華代子	TOEIC演習	<ul style="list-style-type: none"> ・学生同士の友好関係の構築が出来る対話の機会を取り入れた。 ・各学生のレベルに応じた時間や問題量を学生自身が選択できるようにした。 ・月1回程度の席替えを行い、他の学科や学年の学生と交流する場を増やした。 	教員は「教える」という視点のみならず、学生視点の「学ぶ」を意識することが大切であり、学生の個性を尊重し、教室環境で学習の責任を可能な限り学生に委ねることが重要である。

授業の方法の工夫についてはグループディスカッション、クイズやアンケートの実施、学科SALCによる学習指導、各学生の能力に応じた選択肢を設けるなど、学生を能動的に学修させる工夫がそれぞれに盛り込まれている。実習系科目であれば、学生の能動的学修を促すことが可能であるが、受け身主体の座学系科目であっても、工夫によっては学生の能動的学修を促進することが可能であることが示唆される。

学生間および教員との関係の工夫について見ると、学生が教員に質問しやすい環境を提供する工夫が挙げられる。学生から教員に質問する行動はハードルが高く、簡単ではないが、学生・教員間の信頼関係構築によってそのハードルを低くしようとする工夫が伺える。勿論、学生間の友好関係が構築されれば、互いに教え合う中で生じる疑問を教員へ質問しようとする行動を促すものとも考えられる。以上のように、学生の学力を考慮しつつ、学生の能動的学修を促し、学生教員間の距離を縮める（質問できる環境を作る）行動が学生より評価されている。

一方で、受賞教員の授業改善に向けた提言に着目すると、授業内容、方法および学生との関係のみならず、教える側（教員側）の姿勢について共通的な意見が述べられている。特に教員側が学生の能力を勝手に決めつけ、教育を諦めるのではなく、“どのように理解させるか（学ばせるか）”を常に意識する教育姿勢が重要であることを指摘している。更に、単一の科目だけでは対応できない問題や環境構築を学科単位で共有し、科目間リンクを強化させることが今後の授業改善に必要不可欠であることも述べられている。

学生による授業アンケートの中で、学生と教員の関係に深く関連する項目が5つある。

【項目5】満足度

【項目6】理解度

【項目8】質問への対応

【項目13】熱意

【項目15】講義の進度

表4は上記の項目に対して受賞者の平均値と総科目の平均値を比較したものである。表より受賞者の平均点は総じて総科目平均点を上回っ

表4 各項目に対する受賞者と総科目平均の比較

教職員	授業科目名	授業アンケートの質問項目				
		第5項	第6項	第8項	第13項	第15項
久次米 遼孝	航空法規Ⅰ	4.65	4.68	4.65	4.70	4.59
榎山 興生	航空力学	4.82	4.86	4.86	4.86	4.86
池辺 洋一郎	航空機検査概説	4.78	4.83	4.78	4.83	4.78
中牟田 侑昌	工業力学ⅠB	4.54	4.55	4.61	4.88	4.56
井野川 人姿	基礎無機化学	4.40	4.31	4.62	4.69	4.64
馬頭 亮太	インタラクションデザイン実習	4.71	4.61	4.68	4.79	4.64
大栗 誉敏	薬学基礎生物学	4.71	4.53	4.42	4.79	4.51
宝来 華代子	TOEIC演習	4.38	4.26	4.65	4.79	4.56
総科目平均		4.33	4.25	4.23	4.51	4.32

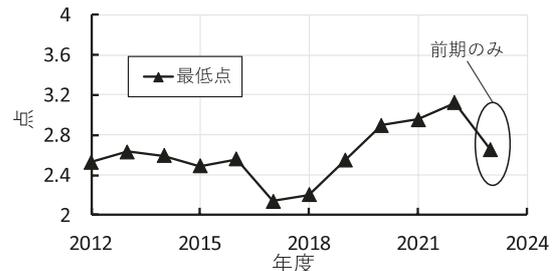
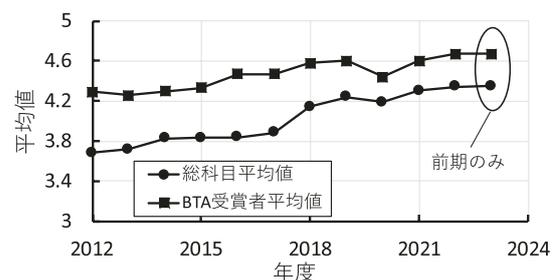


図1 総科目・BTA受賞者平均および最低点推移

ている。つまり、授業において受賞者が行ってきた工夫が学生に“熱意”として伝わり、評価されていることを意味する。特に理解度【項目6】の平均値が高いことは、教員が受講生全体および個人の理解度を把握し、誠意をもって対応された教育効果を裏付けるものと言える。

図1に2012年度からの学生アンケートにおける総科目、BTA受賞者平均値と最低点の推移を示す。図より2012年度以来、総科目、BTA受賞者平均値はともに右肩上がりの傾向を示している。総科目平均点が急激に上昇している年度はポートフォリオによる学生の振り返りと授業アンケートが紐づけられた年であり、その効果が顕著に現れている。特に注目すべきは近年の総科目平均点とBTA受賞者の平均点の差が小さくなっている点である。これは本学全体の教育的スキルや教育姿勢が改善傾向にあることを意味する。一方、最低点を見ると、年

度毎に増減は見られるが、全体平均としてはあまり改善が見られなかった。

5. 考察

各 BTA 受賞者の報告では各授業に対する教育手法、考え方および教員の思いなど、有用な意見が数多く述べられた。この実績として、表4に示した各項目に対する BTA 受賞者の平均値が高いことは注目すべき点である。授業改善の提言で述べられた教育の姿勢（わからないからダメと諦めるのではなく、どう理解させるか）が根底にあり、そこから生まれる各授業手法によって学生の能動的学修を促す。これが学生のモチベーション維持・高揚へと寄与し、教員の熱意が学生に伝わった結果、高評価へと繋がったものと考えられる。また、専門分野をいかにみ砕いて学生に伝えるか、また能動的学修を促すための授業準備に対する労力や熱意も重要であると考えられる。

一方では講義準備に対する労力の限界について考えなければならない。最も重要な点は学生の基礎学力であると考えられる。時間を掛けてみ砕いた説明を行ったとしても、そのこと自体を受け止める基礎学力に達していなければ成立しない。ここに割く労力と時間が多くなれば必然的に講義自体の質を低下せざるを得ないことが懸念される。COVID-19 感染拡大防止による影響や大学入試の多様化によって一定学力の確保が厳しくなった現在、また今後義務化される合理的配慮への対応を考えれば尚更である。だからこそ、本学基礎教育課程と専門教育課程の連携が強化されるべきと思われる。逆な見方をすれば、連携強化によって一定の基礎学力が身につけば、教育的姿勢によって更に学生の能動的学修を加速させることが可能であると考えられる。

現在、崇城大学での FD 活動は多岐にわたっている。大学設置基準改正以前から授業アンケートと BTA 授与がスタート⁵⁾-⁷⁾し、長年の取り組みによって、崇城大学の教員の PDCA サイクルがある程度定着し、着実に教員の授業改善に効果が現れている。前述したが、図1は

それを裏付けるものと考えられる。良い見方をすれば、本学の FD 活動による成果と言えるが、厳しい見方をすれば、現在の評価方法が形骸化し、各授業の本質的な評価に結びついていない可能性も否定できない。多様化する学生の能力とそれに対応する講義手法も変化しているはずである。一方、総科目平均点の最低点についてはあまり改善傾向が見られなかった。これは点数が悪いことを批判するものではない。学生にとってどうでもよいと思う授業で評価する“3点”と、厳しさをもって懸命に努力している教員が評価される“3点”がある。点数は同じであるが、その本質は全く異なる。このような実態を的確に評価し、真に授業評価を教員の授業改善にとって有意義なものにする意味でも、現在実施している評価方法を再検討すべき時期に来ているものと考えられる。

これまで COVID-19 感染拡大防止の観点から中止されていた BTA 受賞者の公開授業（授業参観）が令和4年度より再開された。これは BTA 受賞者の授業を参観することで、授業方法、手法および考え方などを共有し、自らの授業改善に活かして頂くことが趣旨である。現在 FD 委員会では公開授業での学びを参観者および授業実施者が互いに活用できる施策を検討している。その一つが授業参観報告書である。これは参観者と授業実施者との意見交換によって互いに“気付き”を与えることを狙った施策である。しかし、新たな問題発見という意味では、努力がうまく評価に結びついていない先生方の意見が重要であると思われる。公開授業の参加者増加に向けた施策も並行して進めることが必要不可欠である。FD 活動は、言わば大学教育活動の PDCA サイクルにおけるチェック機構である。その機能を果たすためにも現在の FD 活動自体を振り返り、授業評価と BTA 公開授業による学びを有効活用していくことが重要であると言える。

現在大学は教育の質保証が求められている。その本質は、大学が単に知識・教養の修得の場ではなく、得た知識を活用して「何ができたか」を実感できる、課題発見力・解決力を含めた教育体制の構築にある。本学では

平成28年に崇城大学教育刷新SEIP II (Sojo Educational Innovation Project) が答申された⁸⁾。その施策の中に「SOJOプロジェクト科目群の設置」が示されている。この科目は正に「得た知識を活用する場」であり、批判的思考をもって課題発見・解決力を鍛えることを目的としている。更に「大産接続」を意識し、リーダーシップやコミュニケーション力を磨く。このような能力は当然社会人基礎力として重視されるものであり、この認識の下、各学科はそれぞれの特徴を盛り込んだSOJOプロジェクト科目を立ち上げ、実施しているところである。このように大学教育の質向上に向けた施策は展開されているが、現在の学生アンケートには上記評価項目が存在しない。また、このような科目の実行には複数の担当教員が必要であり、グループを対象としたBTAを検討する必要もある。授業内容・手法についても座学とは大きく異なる部分があるため、これらのガイドラインを整備する必要がある。現在FD委員会のワーキンググループでは授業参観の方法論、授業アンケートの精査、授業のやり方マニュアルの精査、講演広報活動などについて議論を展開している。多様化する講義形態に対応し、大学教育のチェック機構として機能するシステム構築が今後の課題である。

6. まとめ

今年度の各受賞者の教育実績は、学生に如何に学ばせるか（理解させるか）という教員の教育姿勢から生み出される教育手法と学生の能動的学修を促すための教員の労力と熱意によってもたらされることが明らかとなった。この教育姿勢はこれまで常識的に行われてきた一方的な講義からの転換の必要性を示すものであり、SEIP I⁹⁾ で掲げられた「教員の意識改革」が着実に浸透してきたことを感じさせた。

平成28年に答申されたSEIP II第1期は既に終わりを迎えた。しかしながら、そこに掲げられた「学生に就学させる大学づくり」が達成されたとは言い難い。今回の受賞者が述べた学生の能動的学修を促す施策が浸透し、学生自ら

学ぶ楽しみを感じる教育体制の構築が期待される。

令和2年に中央教育審議会大学分科会より教学マネジメント指針が示され、大学は入口（入試）、内部質保証、出口（就職）のアセスメントが要求されている。内部質保証は教員・学生双方の教育目的の達成に向けた仕組みの構築であり、FD活動はその一端を担うことになる。本学においてこれまで培われたFD活動のノウハウや教材が、本学で組織された教学マネジメントワーキンググループによってマネジメントに組み込まれ、教員負担を考慮した組織体系の構築によってFD活動が更に活性化することが期待される。

謝辞

共著者であるBTAを受賞された8名の先生方には、授業への取り組み方に関して執筆をお願いした。また、「授業に関する学生アンケート」のデータ解析においては、教務課関係各位、特に猶野郁氏と西村倫代氏に多大なるご尽力を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- 1) 大嶋康裕ら 編著, “令和2年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して(第5報)”, 崇城大学紀要, 第47巻, 97-101 (2022)
- 2) 黒岩敬太ら 編著, “令和3年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して(第6報)”, 崇城大学紀要, 第48巻, 99-112 (2023)
- 3) 文部科学省, “大学設置基準等の一部を改正する省令(平成19年文部科学省令第22号)”, 第25条の3関係 (2017)
- 4) 迫口明浩ら 編著, “平成30年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して(第3報)”, 崇城大学紀要, 第45巻, 97-110 (2020)
- 5) 麻田直人 編著, “ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して”, 崇城大学紀要, 第43巻, 235-248 (2018)
- 6) 麻田直人 編著, “平成29年度ベストティーチ

ング賞受賞教員の授業について - 更なる授業改善を目指して（第2報）”, 崇城大学紀要, 第44巻, 211-223 (2019)

- 7) 長濱一弘ら 編著, “令和元年度ベストティーチング賞受賞教員の授業について—更なる授業改善を目指して（第4報）”, 崇城大学紀要, 第46巻, 205-218 (2021)
- 8) 松下琢ら, 「令和元年度 崇城大学 教育刷新プロジェクトII (SEIP II) 推進のための全学説明会資料 (趣旨説明)」, p. 1-32 (2019), ※本学独自の教育的施策であるため, 学外には公表していない.
- 9) 小野長門ら, 「EI プロジェクト答申 (SEIP: Sojo Educational Innovation Project)」, p. 1-41 (2010), ※本学独自の教育的施策であるため, 学外には公表していない.

